

## 「性」は決して男と女の2種類とは言えないんですよ。

現在受け持っているゼミでは、ジェンダーに代表されるさまざまな社会的問題に対し、多様な視点からアプローチを試みている永松先生。  
だが、先生自身が「思いも寄らなかった」と語るように、初めからこの分野に興味があったわけではない。中学で始めた英語を皮切りに、高校ではドイツ語、大学ではラテン語とギリシャ悲劇、大学院ではイギリス文学…と、興味のままだにいろいろ勉強を続け、現在の専門分野へとたどり着いたのである。  
永松先生のこれまでの研究者人生を、少しばかり追いかけてみよう。

### ドイツ語を学ぼうと進学した 大学でギリシャ悲劇に出会い 西洋文化の根幹を学んだ

芸術の好きな両親の下に生まれ、割合に音楽や美術に触れる機会の多い子供時代を送ったという永松先生。ドイツやイタリアやフランスといった国々に自然にあこがれを抱くようになり、次第に外国語へも深い興味を覚えるようになったという。それでも、実際に勉強を始めたのは中一の英語の授業が初めてで、周囲の友人たちと一緒にであった。「学校での勉強もしましたが、NH

Kラジオの「基礎英語」もよく聞いていました。そのおかげで私の英語も基礎が固まったような気がします。伸び伸びとした自由な家庭で、何をしてもよしかられることはありませんでした。英語のスキットを家で繰り返し暗唱していると家族にうるさがられたので、近くの公園に行つて一人で練習したりしていました。英語を楽しみながら自然に自ら学ぼうとしていた記憶があります。そうやって英語にそこそこの自信が出てくると、徐々にドイツ語やイタリア語も勉強したいと思うようになりまし

特にドイツ語は音が美しく、はっきりしていて日本人にも発音しやすくと感じたため、高校ではドイツ語のクラスにも入つて本格的に勉強を開始。ドイツ語は英語と違うところもあれば、似ているところもある――そこがますます面白く思えた永松先生は、大学では英語とドイツ語を勉強しようと考えようになった。「当時、NHKテレビのドイツ語講座で講師を務めていたICUの先生の解説がわかりやすかったので、その先生の下で勉強しようと考えICUを受験しました。ところが合格はしたものの、私の入学する直前の3

月に、何らかの事情でその先生が他の大学に移られてしまったんです。それが私にとって第一の転機となりました」  
目標の一つを失つても、語学を勉強したいことには変わりなかった永松先生。一般教養で「西洋古典」という授業を受け、新しいジャンルにも強い興味を抱くようになった。それは、古代ギリシャやローマ文明に関する講義であった。「その授業ではギリシャ悲劇を読むのですが、ほとんど期待していませんでした。先生自身がギリシャ悲劇



永松 京子 (ながまつ きょうこ)

国際基督教大学教養学部人文学科を卒業し、1980年同大学大学院比較文化研究科比較文化専攻博士前期課程を修了。母校の助手を経て帝京大学文学部英文科助手、帝京女子短期大学助教授、中央大学総合政策学部助教授などを経て2004年より現職。現在は19世紀および20世紀の英国文化・文学について研究する傍ら、ジェンダーやセクシュアリティに対する社会的な視点についても考察を深めている。



「新英和中辞典」の執筆、日本ハーディ協会50周年記念論文「トマス・ハーディ全貌」、「喪失と覚醒」、「19世紀後半から20世紀への英文学」などの論文がある。

を本当にお好きだったようで、その魅力をいかに学生に伝えようかと情熱あふれる授業を展開していました。私自身も非常に心を打たれまして、専門的に勉強してみようと思うようになりました」

そんな経緯があつて、永松先生は学部生時代に古代ギリシャ語とラテン語を専攻した。これらの言語は現在使われている言葉ではなく、いわゆる死語であるが、多くの西洋言語の源となったものであるため、根幹でのつながりを強く意識させられたという。そして何より有意義だった

のは、キリスト教以前の西洋文化がどういうものかを初めて知ることができたこと。4000年も昔から現在の西洋文化につながっていく根幹の部分の学べたのは、永松先生自身にとって貴重な体験だったようだ。

**現代日本と同じような問題を多く抱えていた19世紀のイギリスで生まれた文学に興味**

大学卒業の時期が近づいてくると、否が応でも卒業後の就職の心配をしなくてはならない。しかし、永松先生は本格的に学問に取り組みたい気持ちが高く、就職するよりも少し勉強を続けたいと心の中で思っていた。ただ、専門的に学んでいた内容は一部の大学でしか扱っていないのが現状。そこで将来の就職のことも視野に入れ、大学院では英語を専門的に研究することにした。第二の転機である。

「私は大学院では、19世紀のイギリス



授業の資料を配る先生と真面目で明るい雰囲気のある学生。

ス文学を専攻することになりました。なぜかと言いますと、19世紀のイギリスが今の日本の置かれている状況と非常によく似ていると感じたからです。19世紀当時、イギリスは世界中で最も進んだ技術を持っており、植民地もたくさんありました。世界中から輸入した原料を加工し、付加価値をつけて輸出することによって

お金をもうけていたのです。その一方で、ドイツやアメリカなどにいつか追いつかれ追い越されるのではないかと恐れを抱いてもいた。国内では公害や自然破壊のような現象が目に見えてひどくなり、お金持ちが増える一方で貧困層も拡大し、犯罪も増加する傾向にあったのです」

このようなさまざまな問題が、どのような形で文学に表現されるのかに興味を持ち、永松先生は19世紀のイギリス文学を研究テーマに掲げた。そして、それが現在取り組んでいる研究へと結びついていくのである。

「当時のイギリスでは、社会にもいろんな変化が起きました。例えば、イギリスではどの階級に生まれるかがその人の人生をかなり決定していたのですが、19世紀には上流階級の子供でなくてもお金をもうければある程度上にあがれる時代になったのです」

この大きな社会の揺らぎは身分だけにとどまらず、性に対する考え方にも及んだ。当時の中産階級の常識では男性が外に出て働き、女性が家

庭を守るのが当たり前で、特に女性の最大の仕事は子共を産むことだと考えられていた。女子は勉強すると頭脳にエネルギーが行き、子宮にエネルギーが足りなくなると良い子が産めなくなるから、勉強しない方がいいなどという考え方までまかり通っていたのである。しかしこのころから徐々に、女性でももっと教育を受けたいという人や仕事をしたいという人が現れ始めた。今でいう「フェミニズム」が台頭してきたのだ。

「男女の領域が崩れてくるとともに、異性愛ばかりでなく同性愛も話題になり始めました。一部の芸術家たちが、当時犯罪とされていた同性愛の要素を自分の作品の中に取り込むようになり、一般の人々もそういった作品に興味を持つようになったのです。私は文学の背景となる社会について勉強しているうち、このような「性」に関する研究に魅力を感じるようになりました」

現在の日本社会でも、男女の領域や役割が変化し始めているという永松先生。総合政策学部では、「性」に

関することを通して今の社会を見つめ直すという趣旨で、授業を行っているのである。

**私たちの現在の考え方が普遍的な真実ではないことを学生時代に感じ取ってほしい**

総合政策学部では、ジェンダーやセクシュアリティなど思想面を主に担当している永松先生だが、「性」については、今の私たちにとって当然のことでも、ちょっと時代が違うと全く当たり前ではないことがたくさんあると語る。

「時代を超えて普遍的な考え方というのは、実は私たちが考えているほど多くないんです。学生の皆さんには特に、その点に目を向けてほしいと思っています」

例えば、現在の私たちは、人間には男と女がいて、この2つは全く別の性だと考えている。しかし実はこのような考え方は結構新しく、西欧では18世紀の初めごろまでは男と女



丁寧な語り口が印象的な永松先生。

は基本的に同じ性であり、2種類の性とは考えていなかったらしいのだ。男と女を一つの連続したものととらえ、この両者の間にいろんな中間体、すなわち女っぽい男や男っぽい女、男と女が半分ずつとなつていゝる両性具有などが存在していると考えていたわけではありません。

ではその違いをどこに求めたのでしょうか？ その昔、人々は人間の体が宇宙と同様、「火」「水」「土」「空」「気」の4つの元素で構成されており、その割合によって男か女かが決まると考えていたのです」

今そんなことを言われたら、誰もが一笑に付すだろう。ではこれが単なる笑い話で終わるかと言えば、案外そうでもない。すべての人間を「男」と「女」の二種類だけに分けることで起きる問題もむしろある。昔の人々の考え方は、現代の私たちにも意味がないとは言えないのである。永松先生は、ここで現代社会における「性」についても一度考えてみる必要性を訴える。

「今、私たちの社会について考えてみたとき、必ずしも「男」「女」という区分に入りきれない人たちが少なからず存在することに気づきます。とすると、男と女の中間体というものがあつてもいいのではないのか？ むしろ昔の人の考えの方が現代人にマッチする点もあるかもしれない？とさえ思えてきます。そう

考えていくと、私たちが今自然だと思つていることが不自然なかもしれないし、常識だと考えていることがもしかすると非常識なのかもしれないのです」

総合政策学部は、物事を単一の視点ではなく、複数の視点から見てもよいというところが出発点。自然だと思つていたことが実は不自然であつたり、生物学的に必然だと考えていたものが、実は人工的に作られたものであつたり…。そういう視点の転換を自分の中で明らかにしていく学部なのである。

「これまで知らなかった未知のものを発見したり、理解を超えた異質なものと出合つたり、あるいはすでに理解していると思つていたものを別の面から見ると全く違う姿を見せることに気づいたり…。といった体験を、学生全員にしてほしいと願つています」

### 高校生の皆さんへ

永松先生は何度も研究の矛先を変

えてきた経緯があるだけに、最初から専門分野を限定するのはもつたないと考えている。「高校時代はいろんなことに興味を持つこと。そうすればその中から面白いものが見つかるかもしれません」。大学で何を勉強したらいいかわからない人は、手当たり次第に知識を増やすのもいいのではないかとという。「例えば、本を読むとか、芸術作品を見てみるとか、旅行するとか…。何かアクションを起こせば、必ずそこに新しい何かが見つかると思いますよ」。また、現在多くの高校で文科系と理科系をクラス分けし、科目も比較的自由に選択できることに触れ、「私の時代はほとんどすべての科目を強制的に勉強させられました。今となつてはそれも良かったと感じるときがあります。面白くなさそうな分野でも、とりあえず一生懸命やつてみましょう」と一言。さらにインターネットなどで簡単に知識が得られる時代だからこそ、情報を自分なりに使いこなして、自分の意見を持つようにしてほしいとアドバイスをくださった。